

下駄と革靴の ドッキング

—靴をめぐる悩みと工夫—

難波 知子 Namba Tomoko お茶の水女子大学基幹研究院准教授

博士(学術)。専門は、近代日本の学校制服史。著書に『近代日本学校制服図録』(創元社、2016年)、『学校制服の文化史』(創元社、2012年)など。「明治150年」関連施策推進ロゴマーク審査委員。



前回*は、明治時代になって男性の丁髷^{ちやんまげ}がざんざり(散髪)に、女性の結髪が束髪に変わり、それまでの苦労や悩みから解放された人びとのエピソードを紹介しました。このように西洋文化を採り入れて便利になった側面もあれば、新しい悩みや問題を抱えることになった場合もありました。今回は、新たな悩みを生んだ「履き物」について取り上げます。みなさんは靴擦れや外反母趾^{ぼし}などに悩まされていないでしょうか。こうした足や靴をめぐるトラブルが生まれることになったのも、明治時代に洋服と合わせて革靴が採り入れられたことに始まります。

下駄・草履から革靴へ

洋服の着用とともに、足元には革靴が採り入れられました。それまで下駄^{げた}や草履になじんでいた人々にとって、つま先からかかとまでを覆う革靴の導入は、身体感覚や行動様式の変容を伴い、さまざまな戸惑いや苦労が生じたと思われます。とりわけ、足部を覆う硬い革靴の窮屈さと、室内でも靴のまま生活する西洋の習慣は大きなカルチャーショックだったことでしょう。

最初に革靴が必要とされたのは軍靴でした。軍靴は当初、欧米から輸入されましたが、欧米人向けに作られた軍靴はなかなか日本人の足に合わず、また多額の費用もかかったため、国内で

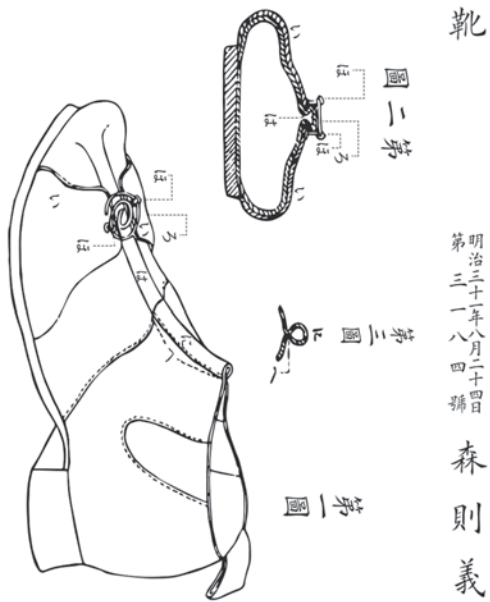
の製造が急がれました。日本における製靴業の始まりは、明治3年(1870年)に西村勝三が東京築地に設けた製靴工場といわれています。明治時代の軍靴は、足袋^{たび}などのサイズ表記として使用されていた「文」で表され、明治43年(1910年)には、9文3分(22.5cm)から12文3分(28.8cm)まで、7mm刻みで10種類のサイズが設定されました。現在の5mmずつのサイズ展開と比べると、やや大きな刻み方と言えます。

靴擦れと外反母趾の問題

当時の軍靴はあらかじめサイズを決めて作る既製靴でした。しかも初期の国産靴は、製造技術も経験も足りず、兵士の足に合わない場合があったと思われます。明治23年(1890年)に行われた第1回陸海軍連合大演習では、訓練中に患った病気やけがの患者数が調べられましたが、最も多かったのが「靴傷」でした。兵士たちが訓練中最も悩まされたのが、靴擦れだったのです。また慣れない革靴は、外反母趾などの弊害ももたらしました。陸軍の軍医であった森鷗外は、足に合わない靴の弊害として、圧痛やまめ、魚の目、巻爪のほか、ひどい場合には骨の変形を引き起こすことがあると指摘しました。そして健康的な靴作りの要点は、足を靴に合わせるのではなく、靴を足に合わせて作ることだ

* ウェブ版「国民生活」2017年12月号「明治時代の生活に学ぶ」http://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-201712_12.pdf

図1 「靴」(特許第3184号)



と述べています。

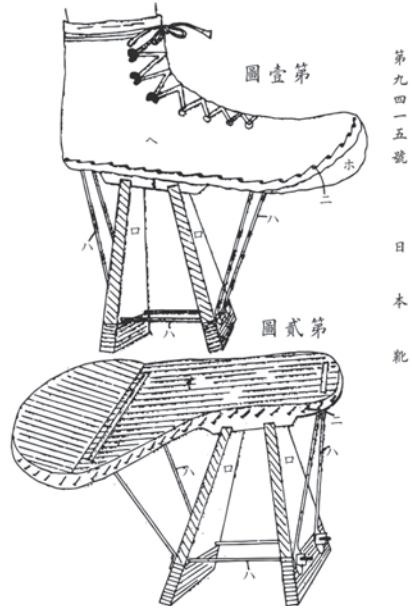
現代の靴作りは明治時代に比べ、格段に進歩したはずですが、いまなお私たちは靴による足のトラブルに悩まされてはいないでしょうか。それは、足には合わなくても、格好のいい靴、流行のデザインの靴を無理して履くことがあることも一因でしょう。鷗外は、流行靴や見た目がいいだけの靴を選ぶことを戒め、健康的な靴を選ぶよう説いています。しかし美的な欲求は、そう簡単にコントロールできないことを歴史は示してくれています。

特許からみた靴をめぐる発明

革靴を経験した明治時代の人々は、日本の気候や文化に合わせて改良を施すため、さまざまな知恵をめぐらせます。明治時代の特許情報を見ると、靴をめぐる発明がたくさん出てきます。中には思わず笑ってしまうようなアイデアもあれば、今でも通用しそうなものもあります。

例えば、明治31年(1898年)に登録された「靴」(第3184号)は、甲の部分に襪ひたを寄せ、留め具で調整することにより、歩くときの締め付けを緩和するとともに、隙間から足の蒸気を逃

図2 「日本靴」(特許第9415号)



出典：「特許情報プラットフォーム」(図1・2)

がすよう設計されたものでした(図1)。靴の中の蒸れた空気をそのままにしておくと、水虫(当時は「靴虫」と呼ばれたようです)の原因になるため、通気性をよくすることが、履き心地と合わせて考えられました。また明治38年(1905年)に特許権が認められた「日本靴」(第9415号)は、靴と下駄が合体したアイデアです(図2)。なぜこのようなかたちが生まれたかということ、当時の道路が今のように舗装されておらず、雨が降れば水や泥で高価な靴を汚してしまうおそれがあったからです。高さのある下駄を靴に装着することで、靴を汚すことなく外出できるように考えられています。その他にも玄関の上りがま框に取り付け、汚れた靴を手で触らずに脱ぐことができる「靴脱ぎ」の道具も発明されています。明治時代の日本では革靴そのものは採り入れられましたが、室内でも土足という習慣は普及しませんでした。

特許のアイデアからは、外来の革靴を生活環境や生活習慣に合わせて変化させようと試行錯誤しているようすが伝わってきます。明治時代に新たに生まれた靴の悩みをいかに克服するか、私たちはまだ試行錯誤の途上にいるのかもしれない。